年号：1707 年

月日：10 月 28 日

災害名：宝永地震（M8.6）の概要

大分県佐伯市米水津　浦代浦地区、間越地区位置図

出典：国土地理院

【宝永・安政大地震の発生後、津波が河川を遡上：延岡市】

・宝永地震（宝永 4 年・1707 年）が発生した当時の藩主・三浦明敬が残した三浦家文書「日録」によれば、「未時後、東海大波入、河川濁逆流」と、地震発生から１時間経つかどうかのタイミングで東海へと津波が押し寄せ、その津波が河川を逆流したことが確認できる。

・この時の津波の高さは、水かさの多い大潮の際と比べても「四五尺水高」として、120～150ｃｍ程度の上昇があったことを示している。

【図1】宝永地震における延岡地域の被害状況

出典：延岡市文化課文化財係

【津波被害を石碑で伝える養福寺：浦代浦地区】

・大分県豊後水道沿岸地域は太平洋に面するリアス式海岸であるため、古くから津波の被害を受けてきた。その中でも宝永４年（1707 年）10 月 28 日の宝永地震、安政元年（1854 年）12 月 24 日の安政南海地震については津波に襲われたことが古文書に詳しく記されている。

・宝永地震は国内最大級の地震のひとつであり、東海地震と南海地震が同時に発生した。震源は紀伊半島沖の北緯 33.2 度、東経 135.9 度、マグニチュードは 8.6 と推定される。中部、近畿、中国、四国、九州で家屋が倒壊。津波は伊豆半島から九州まで及び、２万戸が流失、潰家６万戸、4,900～２万人が死亡したとされる。

・米水津湾に面した浦代浦地区には海岸から 200 メートルほど奥まった山腹に養福寺という古刹がある。地区に伝わる古文書「成松庄屋文書」によれば、宝永地震で「養福寺の石段を二つばかり残す」ところ（海抜高度 11.5 メートル）まで津波が押し寄せたと記録されている。

・宝永地震は午後 2 時頃発生し、津波は約 1 時間後に来襲、浦代浦地区だけで 18 人、隣の色利浦地区で 2 人が死亡した。

・宝永地震の 150 年後、安政元年（1854 年）には安政南海地震（推定マグニチュード 8.4）が発生し、再度津波が押し寄せた。しかし、「地震あれば、必ず津波あるゆえ、気をつけよ」という古老の話を聞いていたため、村人は高台へ避難し死者は老婦 1 名のみであった。

・養福寺には、平成 23 年 3 月の東日本大震災後、津波を風化させまいと「大地震・大津波の碑」が建てられている。石碑には成松庄屋文書の文面と共に「津波は何度も襲う、引き汐は猛烈、油断するな」と古文書の忠告が刻まれている。

▲浦津浦漁港から湾内を望む

▲浦津浦の集落

▲津波高さの標識整備状況①

▲津波高さの標識整備状況②

▲中央の高台にあるのが養福寺

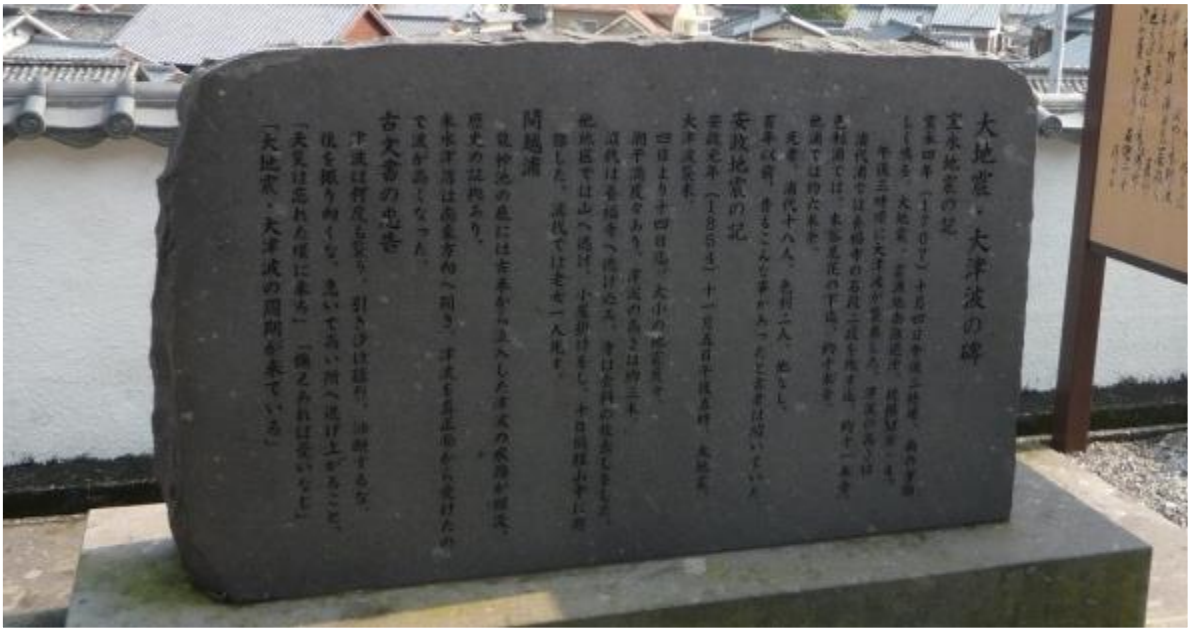
▲養福寺へ上る階段①

▲養福寺へ上る階段②

▲階段脇にある解説板

▲養福寺境内から湾内を望む

▲地区の津波避難所に指定されている養福寺の庭



▲境内に整備された石碑

【津波の記録を池の堆積物で調査：間越地区龍神池】

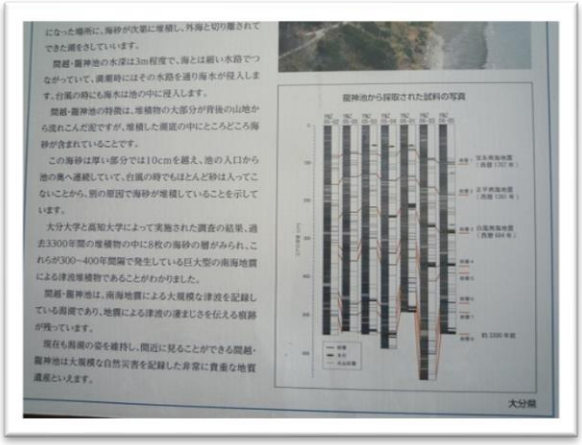
・海沿いの間越地区龍神池の堆積物調査では、過去 3,300 年間の堆積物の中に 8 枚の海砂の層が見られることから、これらが 300～400 年間隔で発生している 10 メートル超の大規模な津波による堆積物であることが分かった。

・龍神池の案内板には、有史以来発生した 3 度の津波（684 年白鳳南海地震、1361 年正平南海地震、1707 年宝永南海地震）を記録した地質試料の写真が掲載されている。

▲間越地区龍神池遠景
（右が海で左に小さくみえるのが龍神池）

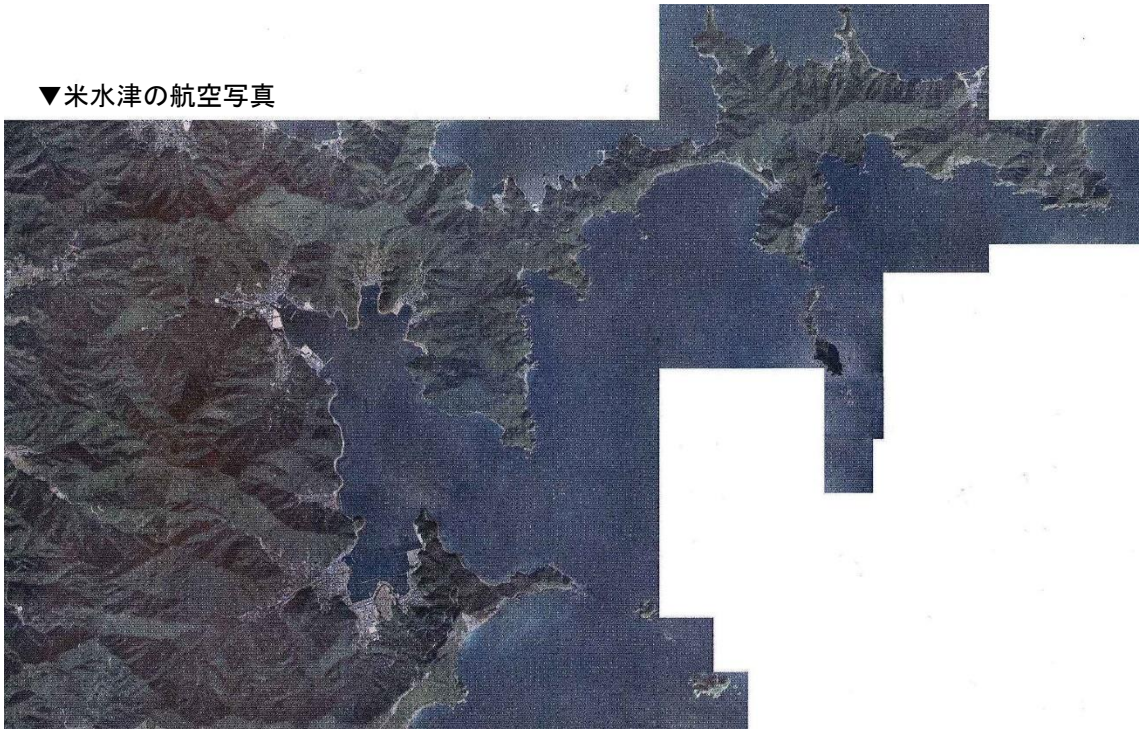
▲龍神池近景

▲池の案内板①



▲池の案内板②

▼米水津の航空写真



▼龍神池でのボーリング調査

コア試料採取地点

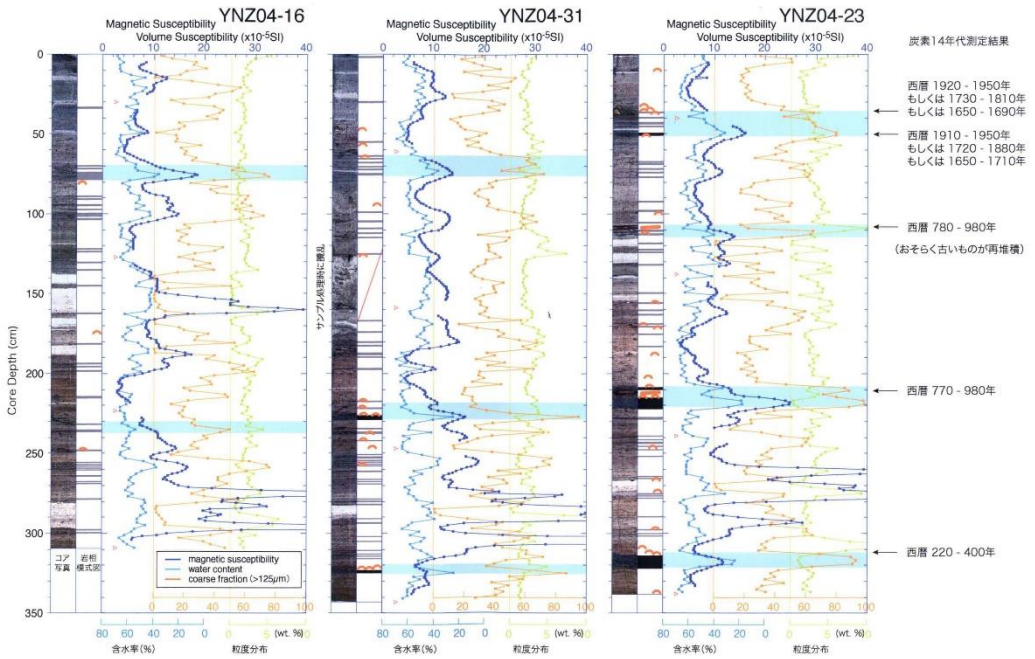
コア試料採の取風景

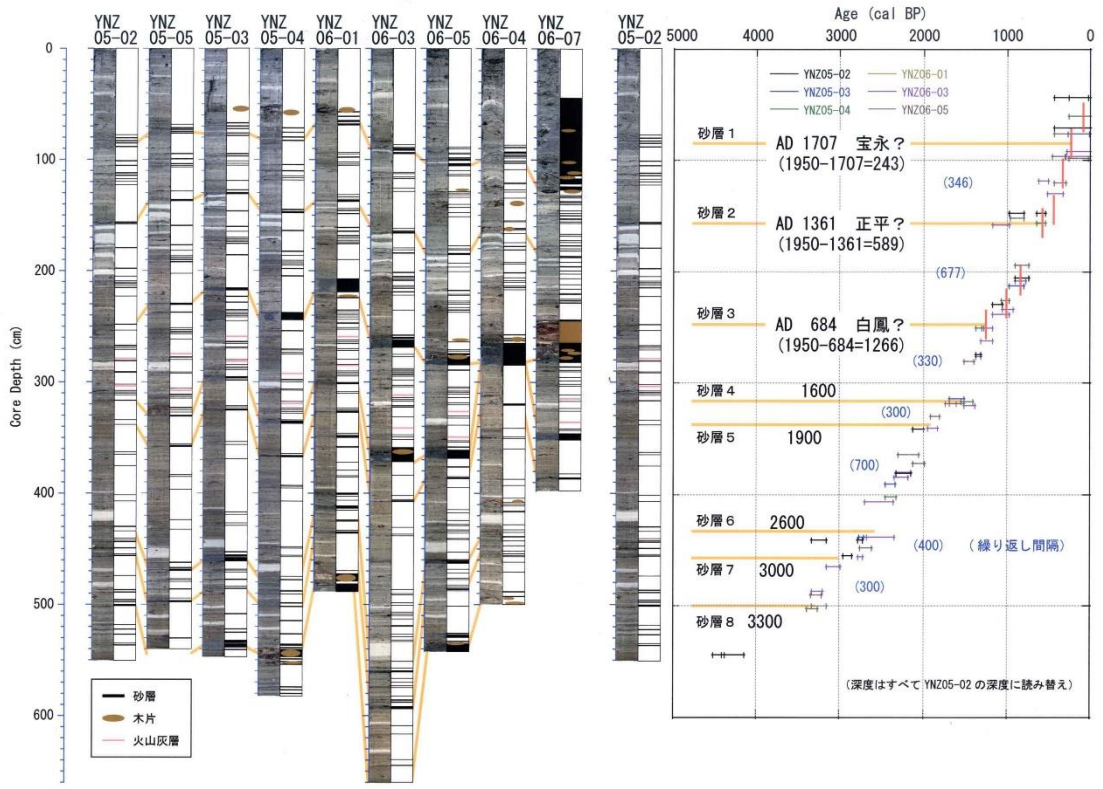
資料：佐伯市米水津振興局提供

▼龍神池でのボーリング調査

資料：佐伯市米水津振興局提供

▼龍神池のボーリング調査結果





資料：佐伯市米水津振興局提供